

323 非定型子宮筋腫の術前診断— MRI像と針生検標本を用いた病理組織学的診断の対比—

大阪市大

柴田幸子, 川村直樹, 伊藤文博, 市村友季,
石河 修, 梅咲直彦, 萩田幸雄

【目的】GnRHアナログ導入に加え, Add-back療法の応用により, 従来であれば手術療法が適用されていた子宮筋腫を長期間保存的に治療する機会が増加している。この際, 稀な平滑筋肉腫を否定する以外に, 非定型筋腫の長期保存療法の是非についても考慮する必要がある。摘出前に子宮筋腫の質的診断を行なう手段としては, MRIや筋腫組織の生検が有用と考えられるが, 肉腫・非定型筋腫を鑑別するために十分な情報が得られるかどうかは不明である。この点を明らかにするため, 両検査法の診断精度について比較検討した。

【方法】手術を予定している子宮筋腫患者で, 針生検の同意を得られた73例を対象として, 全例にMRI検査を行い, 独自に作成した基準に基づいてT2強調画像の筋腫核像を分類した(信号強度・内部信号の性状各5段階)。次いで, 経子宮頸管的針生検を施行し, 1症例あたり2-5個の標本を採取した。術後, 手術摘出標本の病理組織診断と, MRI分類および針生検の病理組織診断を比較した。

【成績】腺筋症9例を除いた64例の摘出標本の病理組織診断は, usual leiomyoma 54例, cellular leiomyoma 7例, epithelioid leiomyoma 2例 mitotically active leiomyoma 1例であった。非定型筋腫のMRI像は多彩で, 一定の相関性が認められなかった。これに対し針生検標本の組織診断では, 摘出標本のそれと90%の一致を認めた。

【結論】本研究では, MRI像のみでの組織像の推定は困難であった。一方, 針生検標本を用いた病理組織検査は良好な診断精度が得られた。針生検は繰り返しの施行も可能であり, 今後, 非定型子宮筋腫の natural history を解明する上で, 重要な役割を果たす可能性が示唆された。

324 CDDP誘発嘔吐に対する5HT₃受容体拮抗剤GranisetronおよびOndansetronの制吐作用の解析

山形県立河北病院

木村和彦, 吉田雅人, 小川比呂志, 大野 勉,
小田隆晴

【目的】近年granisetron(G), ondansetron(O)などの5HT₃受容体拮抗型制吐剤が開発され, フェレットを用いた前臨床試験において有効性の違いが報告されているが, 臨床的に2剤の制吐作用を検討した報告は少ない。今回, CDDPにより誘発された悪心・嘔吐に対し従来のmetoclopramide(M), G, Oを投与し, その制吐作用の違いを検討することを目的とした。【対象】対象は過去7年間にCDDPを中心とした化学療法を施行した婦人科癌患者で, M投与群(M群)19コース, G投与群(G群)21コース, O投与群(O群)23コース。3群につき急性悪心・嘔吐発現率, 嘔吐回数, 遅延性嘔吐の発現率, 食事摂取量, 体重の増減率につき比較検討した。【成績】急性期の悪心・嘔吐発現率で見ると, M群では悪心(95.8%), 嘔吐(81.3%)が高率に発現し, 嘔吐平均回数は8.69日と多発した。G群では26.3%に悪心・嘔吐が出現し, 嘔吐回数は2.42回と抑制された。O群は50%に悪心が, 22.3%に嘔吐が出現したが, 嘔吐回数は0.61回とほぼ完全な嘔吐抑制効果が認められた。遅延性の嘔吐はM群の93.8%に対しG群, O群ともほぼ1/3に抑制された。食事摂取量で5割以上に保てた割合はG群で89.5%と他群に比し高率で, 体重はM群で極端に減少した。【結論】CDDP誘発嘔吐に対し, Gは抗悪心作用が強いため食事摂取量は比較的保たれた。Oは抗嘔吐作用は強いが, 抗悪心作用はGよりは弱かった。制吐作用の評価には嘔吐だけでなく, 悪心の程度も考慮に入れる必要があり, GとOに制吐作用の相違点が認められたことは, 制吐剤の選択に有用であることが示唆された。